

松田郷人
句画集

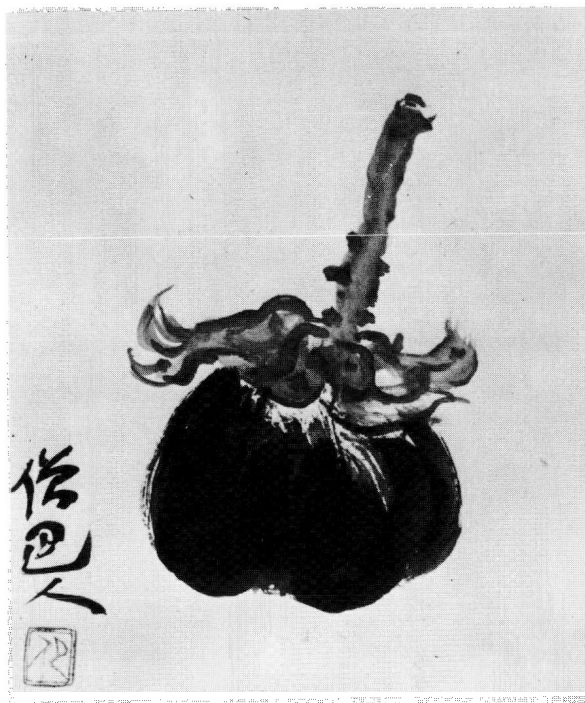
多羅葉

巴人先生賜論より

★成せば成す

越後巾着
茄子の貌かたち

郷人



松田郷人

〒939-07 富山県下新川郡朝日町金山500
☎ 0765-83-0404

松田郷人句画集 たらよう 多羅葉

定価 7,000円

昭和59年12月2日発行

編集 「多羅葉」刊行委員会 代表・岡田三郎

〒939-07 富山県下新川郡朝日町道下980-1

☎ (0765) 83-2920

発行所 (株)富山県人社

〒933 富山県高岡市大町4-22

☎ (0766) 25-5211

限定 500部

松田郷人
句画集

多羅葉

題字 内閣総理大臣・中曾根 康弘

多羅葉とは

モチノキ科の亜熱帯性常緑喬木。西日本にも自生。高さ約八メートル。葉は長楕円形で厚硬、革質、光沢を有する。葉裏に棒などで文字を書くとき黒変するので、古代インドでは写経に用い、それを数珠つなぎに綴って経本としたとも。一説には願いごとを書いて佛前に捧げたともあるから、現在の祈祷符や短冊の用も足していたものと思われる。



多羅葉にきざむころ根滝の寺

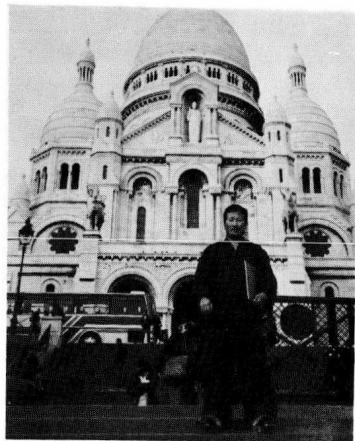
郷人

著者近影



大岩山日石寺「多羅葉句碑」除幕式にて幸代夫人と。(昭和59年6月3日)

郷人が行く!! (欧の細道) — 昭和59年1月・3回目の外遊 —



モンマルトルの丘(雪下駄に注目)



サンターヌ画廊の

細川チズコ社長と

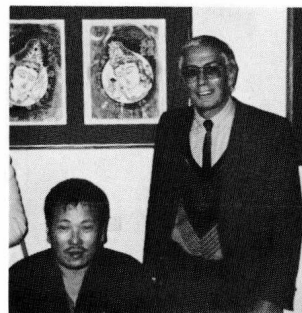
女流画家たちとパンスにて



日石寺中田管長からの志功の軸を
バート文化局長に手渡す(ニュース)



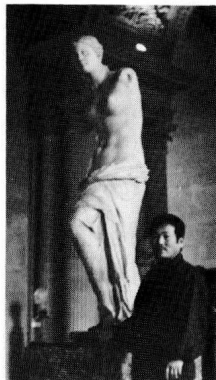
ディナーでサインせめにあう



受賞作「二天観音図」と
ルロラン日仏会長と



バチカン警護兵とサムライ



6年ぶりの再会



フェレンツェ望のミケランジェロ広場

序にかえて

「葉」ということ

亜熱帯植物に多羅葉（たらよう）という常緑喬木があります。この葉裏に椿などで文字を書くとき黒変するので、古代インドでは写経や手紙に用いたといわれ、現代郵便の「葉書」の名称の由来といわれております。

私が椿の葉の五倍程もある多羅葉の葉を初めて見たのは、国の重要文化財で奈良朝末行基上人の作と伝えられる磨崖不動尊で有名な、富山県上市町の真言密宗大本山大岩山日石寺の境内でありました。

この日石寺は、眼の弱かったあの棟方志功法橋が一昼夜にわたって、不動尊像と対峙（たいし）なされたというゆかりの寺で、私もその神通力にあやかるべく多羅葉に「画業開眼」と書いて、不動尊に供えたものであります。

御存じのように木版画というものは、墨の濃さ、かすれ具合など何枚摺っても同じものは二枚としてできないものであり、それが又、木版画の妙味でもある訳で、三十枚摺って一枚でも気に入ったのがあれば上出来となります。そしてそんな時、いつのまにか般若心経を唱えながら一枚ずつ摺っている自分に気がついたのです。一枚摺るたびに経文を重ねていく……。その行為こそ古代インドで多羅葉に経文を綴ったのと似てはいないでしょうか。俳句も句会などの際、短冊に作者の思いの句を重ねて出句する訳ですが、これも又、私には多羅葉に願いを書いたのに似ています。

さて私の場合、俳句と絵を一体として制作した版画の事を「句板」と称していますが、故にその句板一枚が私にとっては心の写経であり、人間としての願いであり、作者としての祈りでもあるのです。そんな意味から、私の句板作品一枚のことを「一葉」と数え、作品そのものを「葉」といい、題名も例えば「真善美聖之葉」と呼ぶことにしたのであり、それらの作品集のことを「葉の重ね」と呼ぶ由縁であるのです。

私淑の志功法橋は、木版画のことを「木板」と呼び、その作品のことを「柵」としておいでになります。「柵」というのは垣根の柵ですが、志功法橋の「柵」とは四国の巡礼の方が寺々を廻られるとき、首に下げる寺々へ納める廻札、あの意味なのです。この札は一つ一つ、自分の願いと信念をその寺に納めていくという意味で下げるものですが、私の願所に一つ一つ願かけの印札を納めていくということ、それがこの柵の本心であり私の板画の題に「柵」とつける本当の意味なのですと申しておられますが、郷人ごときの作品はとも／＼柵と呼ぶには心技ともにほど遠く、私の場合は多羅葉に託した画人としての「広い願い」、俳人としての「大きな祈り」を託したわずか一枚の葉っぱ「葉」と呼んで満足しているにすぎません。

一葉づつ、一生かかって自分の生きざまをその「葉」にかけて彫りつづける、その心根が今、やっと私の胸に芽生えたのです。

多羅葉にきざむこころ根滝の寺 郷人

この句はフランス美術大賞展出品作「二天観音図」の入選を祈願して日参した日石寺にて詠んだものですが、このような「葉の話」をお聞きになれば、俳句に無縁な方でも自らのその句意は、おわかり頂けたものと思います。

さて私の「葉の願い」が不動尊を通じて天にとどいたものか、受賞の栄を受ける運びとなり、それを記念して中曽根総理大臣より題字を賜り、中田真弘管長の寛大なる御発案のもと、その上、郷人後援会と野性派句会の御尽力により、大岩山日石寺名物の六本滝のほとりに前記の「多羅葉」の句碑を建立して頂き、ここにまた句画集の上梓を見ますことは誠に画家冥利、俳人冥利につきるものと深く感謝している今日このごろでありますと共に、仏心の存在を強く今に信じている私であります。

合掌

昭和五十九年十一月三日文化の日

松田郷人

目次



巴人先生賜論より

★絵ごころは「大円覚」ぞ虹の宿 郷人

序にかえて……………	7	晃晃劔岳……………	29
		初雪の朝……………	30
		待春の櫺……………	31
		寒の海……………	32
画葉の重ね……………	15	熊倉岳……………	34
		残雪の黒部……………	35
黒部冬湊図……………	17	越中待春図……………	36
旭日雲海図……………	18	二天観音図……………	37
二天図……………	19	鯨と麒麟……………	38
立山双瀑図……………	20	壮寿雪吟之葉……………	38
紅葉の発電所……………	21	大鯛大皿之図……………	39
黒部六月……………	22	せせらぎの主図……………	39
冬景親不知……………	23	大河野性の図……………	40
山家萌月図……………	24	黒部龍流図……………	41
落日の峡谷……………	25	早春の僧ヶ岳……………	42
山新樹……………	26	雪の沢杉林……………	43
青雲富士……………	26	巖劔図……………	44
雪国孤春図……………	27		
朝陽劔岳……………	28		

冬花図……………	45	陶絵……………	62
劔声図……………	46	私の選んだこの一句(着稿順)……………	65
郷春の詩……………	47		
越中双岳図……………	48	日本画家 岩崎巴人……………	66
残雪の里……………	49	富山県知事 中沖 豊……………	67
相生の松……………	50	美術評論家 三宅正太郎……………	68
忍耐の竹……………	52	俳 人 草間時彦……………	69
野生の梅……………	53	女 優 国会議員 山東昭子……………	70
雪嶺湖月図……………	54	日石寺管長 中田真弘……………	71
二名山……………	55	俳 人 角川照子……………	72
雪の親不知……………	56	交通教育者 後田外一……………	73
滝谷夕映……………	57	俳 人 斎藤美規……………	74
明星春岳之図……………	58	歌 人 深山 榮……………	75
早春譜……………	59	童謡作曲家 小柳和行……………	76
残雪の鉾岳……………	60	国会図書館長 荒屋正浩……………	77
檜倉山夕照……………	61	詩 人 稗田堇平……………	78
巴流図……………	61	木工芸作家 横山一夢……………	79

洋画家	佐藤昌祐	80
俳人	阿部完市	81
小説家	源氏鶏太	82
富大名譽教授	植木忠夫	83
俳人	船平晩紅	84
学術記者	野島清治	85
洋画家	前田常作	86
作曲家	岩河三郎	87
陶芸家	池上栄一	87
俳人	赤塚五行	89
美術評論家	横山雅始	90
俳人	岩木安清	91
漫画家	山根赤鬼	92
漫画家	山根あおおに	93
エンジニア	室幹夫	94
書家	猪又翠晴	95
洋画家	嶋津和幸	96

文庫理事長	大宅 昌	97
歌人	井口知行	98
俳人	能村研三	99
俳人	松倉悟童	100
黒部市長	荻野幸和	101
郷土史家	川上嘉一	102
写真家	山本正勝	103
国会議員	片岡清一	104
Y・K・K会長	吉田久松	105
郷人後援会長	鹿熊安正	106
句葉の重ね		107
大河野性	三十五句	109
麓家	三十五句	117
紺碧の海	三十五句	125
榊の月	三十五句	133
月唱念佛	三十五句	141

水墨の郷	三十五句	149
立山劔	三十五句	157
多羅葉	三十五句	165
欧の細道	三十五句	175
墨色の碑	三十五句	191
秋葉の重ね		201
独行道句画二刀流		204
「郷人」という雅号と私		208
美しき死途への死闘		215
息子よ時間は君のものだ		217
わが子シツタルダへ		219
自句自解の詩 天望閣にて		220
自句自解の詩 雪どけのポエム		221
自句自解の童謡 蕎麦の花		222
自句自解の詩 雪は海から天へ降る		224
絵画と俳句の接点		225

画家と画人		228
松田郷人と世界の絵画展		231
野性半紀		233
あとがき		234
資料提供・撮影協力者一覧		236
附録		237
印譜		246

賜画・岩崎巴人
装丁・道下行道

画葉の重ね



巴人先生賜論より

★現し世の滝のぼりゆく緋鯉なり

郷人